
短編詰め込み所。

いえしき てびし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編詰め込み所。

【Nコード】

N2215G

【作者名】

いえしき てびし

【あらすじ】

なんの繋がりもない沢山の話置き場。

すっごく短い短編の詰め込み場所。

「狗」

まだ温かい。

まだ生きてる。

なのに死に神は喉元に冷たい刃を突き付けて、ひそやかに笑んで振り下ろそうとしてる。

先が決定的な状態だって分かってる。

自分の立場なら何をしなきゃいけないかなんて分かってる。分かってる。

お願いします、そんな言葉を吐けるような人生は歩いてない。

それでも願わずには、紡げずにおれない。

つれてかないで。

いくら叫んだって、助からないのは目に見えていて、だどもプライドなんて投げ捨てて、子供みたいに泣きわめいている俺の頬を、あんたはなんでそんな優しく撫でてそして目をつむって……最後にしたことがそれ。

もう動かなくなったあんたの体に、俺は気持ち悪いくらいに、惨めったらしくしがみついて、情けないくらいに弱々しい声で叫んでる。いっちゃ……やだ。

冷たくなっていくあんたを動かしていた水。容れていたにくのかたまり。

その側で俺は、主をなくしたいぬになりさがった。

「ねがいごとのかなえかた」

ぬるっ。

掴んだ石が、指から滑っていく。

無感動にそれを見下ろすと、メノは腹で手を拭った。ごわごわとした布の感触さえ、感じなくなっていた。

それでも、行かなくては。

妹が

大切な妹が

と　ご

は　　　い　が　ね

かみさとあとは、

助けてと、何人の人に叫んだだろうか。

何度世を恨んだだろう。

何度神を憎んだだろう。

思っても、何も始まらないから、方法を探し続けた。

それでも、だれも妹を助けてくれはしない。

世界はそこまで俺を見捨てているのか。

助けて、頼むと慟哭を繰り返す。

それでもな何も変わらない。

あるひ、あるひと言った。

東の果てに、賢者がいると。彼は全てを知っているから、妹を助ける方法もきつと知っているだろう。

聞くや否や、俺は駆け出した。

まずは家へ帰り、妹に理由を。そして、旅の支度を。そして、

「例えば俺が間に合わなくとも、一人ではいくな。必ず俺が、共に行く」

と、約束をひとつ。

後はひたすら、新しい一日を告げる朝日に身を焼かれ続け、一日の終わりを告げる夕日に背をあぶられ続け。
願いが叶うことを夢見て。

最後の身を裂く岩を、下に投げ捨てた。
視界が一気に広がる。

絶望感が俺を蝕み、形容しがたい思いで背後と変わらぬ景色を眺め遣る。

世界はそこまで俺を見捨てるのか。

外に出ることさえ厭われる妹に、最後まで光を見せぬというのか。
ならばお前は神ではない。

「何を嘆いておる」

声が潰れんばかりに叫んでいると、背後から声が。

その、この荒れ果てた土地に似つかわしくない声質に、一瞬だけ全てを忘れて振り返る。

「何をほうけておる。質問に応えんか」

弾かれたように出た音は、到底言葉と呼べなかった。

「ふん、まあよい。ついてくるがいい。一晩宿を与えよう」

くるりと向きを変え、岩の隙間に向かう。俺は疑いつつも、不思議に思いつつも、その背を追う。

隙間は下へと続き、奥から光が毀れでる。

くり抜いて作られたような部屋が、蟻の巣のようだ。

「して、そろそろ落ち着いたであろう。わしの問いの答えは出るか？」

ゆったりとした椅子と温かい飲み物、傷を癒す手当を与えられて一息ついたところに、そう問われた。

未だ疑問が埋め尽くしているが、溜息と共に妹の事を話す。愛する妹、メレルのことを。

「ふむ。それでわしに会いに来たのじゃな」

その言葉に目を剥いた。

「メノ：か。そなたの名に相応しい名じゃな。意味は強き人。他が為に力を尽くせる強き者、じゃな。そして妹のメレル。黒い鳥の名前じゃ。きつと、美しい黒髪を持っておるのじゃろうて」

世間話を始める相手に、俺はただ驚くだけ。

この者が、妹を救ってくれるのか？と。

黒髪と黒瞳により迫害された妹を、美しいだろうと言ってくれたこの者が。

しかし嬉しさよりも、まさる疑心。

「よし。その願い、しかと聞き届けた」

立ち上がり、長い袖から指が現れ天を指す。

楽しげに歪められた顔に、

俺は

「本当に、そなたが話しに聞く賢者か？」

と尋ねた。

「ほう。わしが他に何にミエルと？」

光を燈し始めた指先をそのままに、再び椅子に腰掛ける。

その年相応の顔に、化かされ、騙され、笑われているのかという怒りが溢れ出る。

「……ただの子供が、ここで何をしている」

這うような低い声に臆さず、少年より子供な少年は、顔にさらに笑みを作り、そして

豪快に笑い出す。

そして

そして

「よくぞ、よくぞ我が真の姿を見破った！今まで来た欲深き者達には一度も分からなんだに！」

そして

「よかろう。よかろう強き者、メノよ!! そなたの望みが全てを、我が叶えよう!! この、世界の果てにて全てを傍観する神が!!」

そして

そして

そして

そして

神は、気まぐれのように

子供の好奇心のように

私の世界を……

＊＊

ラストの意味分からなさは、ただ曖昧にしておもしろがっただけです。

メノとメレルはオランダで実際に使われている名前です。意味も。

「主恋しき梅の情」

まってて…

いま、いくから

だから

だから

だから……

まっててごしゅじんさま

—あるじ

こいしき

うめの

じょう—

ぼくは朝と夕がたがすき。

だって、ごしゅじんさまが会いにきてくれるから。

ぼくのごしゅじんさまははたらき者。

だって、他のひとは太陽がま上にきたらかえってくるのに、ごしゅじんさまは空がみかんいろになるまでかえってこない。

でも、それがぼくのごしゅじんさま。

ぼくの自慢のごしゅじんさま。

ぼくのだいすきなごしゅじんさま。

でも、今日のごしゅじんさまはげんきじゃない。

昨日もそうだった。

そのまえをなんていうか知らないけれど、まえの日も、そのまえの日も、ぼくはごしゅじんさまに会ってない。

いつも、朝と夕がたに会いにきてくれるのに。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ぼくは、どうしたらいいの？

「お前は何もできないよ」

はっぱをゆらして、桜おぼはぼくにいった。

「どうして？」

「お前は何もできないからさ」

桜おぼは、えだを大きくゆらしていった。

ぼくはともかなしくなった。

「なんで？ ぼくはごしゅじんさまがだいすきなのに。どうしてなにもできないの？」

かなしくて、かなしくて、かなしくて。

「桜おぼは、梅を泣かしてどうするの」

紅葉ねえがいった。ぼくのあたまをなでてくれる。

「ふん。私達に何が出来るって言うんだい」

「桜おぼは！」

紅葉ねえは、おこって桜おぼはにいう。でも、ぼくはかなしくてたまらない。

「いいよ紅葉ねえ。どうせぼくたちにはなにもできない。だってただの木なんだもん」

また涙がいつぱいでできた。なんかいふいてもとまらない。

「梅、梅、泣かないで梅」

紅葉ねえは優しく頭をなでてくれる。それでも、ぼくの涙は止まらない。

「……梅、一つだけ、私達に出来ることがあるよ」

ためいきをついて桜おぼははいった。

「なに、なに桜おぼは。ぼくにできることってなに？」

桜おぼはは笑っていった。太陽が、まうえにちかくなる。

「私達に出来ることはほんのちよつとしかない。でも、それは私達にしかできないことさ。：綺麗に咲いて、いい匂いを薫らせて、菅丞相様に愉しんでもらうことさ」

ぼくはともうれしくなった。ごしゅじんさまは、ぼくが咲くとてもうれしそうしてくれる。だったら、ぼくが咲いたら、またげ

んきになってくれる。
また、笑ってくれる。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

春になるまでまってね。

ぜったいに、ぜったいに、きれいに咲いてみせるから。

車が、かえってきた。

「珍しいねえ。菅丞相様がこんな時間にお帰りになるなんて」

「本当、どうしたのかしら。菅丞相様、いつも遅くまでお勤めなさっているはずなのに」

ごしゅじんさま…。

ぼくはともしんぱいになった。ちらりと見えたごしゅじんさまのかおが、とてもかなしそうだった。

「ごしゅじんさま。ごしゅじんさま」

ぼくに見むきもしないで、ごしゅじんさまはお家に入っていく。

なんだかとても恐くなった。

それからしばらくの間、ごしゅじんさまのお家はさわがしかった。

いつもよりたくさんひとが入りしていた。

なにかのじゅんぴをしているんだって桜おばはいった。

ごしゅじんさまがげんきじゃなくなって、すごく、すごく長いじかんがたった。

そんな、ある日。

「ごしゅじんさま、ごしゅじんさま、だいじょうぶ？どうしたの？」
かなしそうなかおで、ごしゅじんさまはぼくをなでた。ぼくはそう
されるのがとてもだいすきだったけど、ごしゅじんさまがかなしそ
うだったらから、ぼくまでかなしかった。

ぼくのこえは、とどかない。

「春になって、東の風が吹いた時は、その風にのせて遠く筑紫大宰
の私の所までお前の薫りを届けておくれよ、私の大切な梅の花。お
前の主人である私がいらないからといって、決して春を忘れるでない
よ」

ごしゅじんさまは、そういつて車にのった。ごしゅじんさまがいっ
たその言葉は、ぼくには少しむずかしくて、どういう意味かわから
なくて。

桜おぼばと、紅葉ねえは、なにもいつてくれなかった。

それから

ごしゅじんさまは

かえってこなかった。

「桜おばば、どうしてごしゅじんさまはかえってこないの？」
桜おばばはなにもこたえてくれない。

「紅葉ねえ、ごしゅじんさま、とおくにおしごとなの？」
紅葉ねえにきくと、こまったかおをした。

「菅丞相様は、とても、とても遠くにあるお国で、ちょっと長い間
お仕えしなければならなくなったのよ」

「ながい間って、いつまで？」

「：長い間よ」

「いつ？いつまでなの？ごしゅじんさま、いつかえってくるの？」
紅葉ねえは、もうこたえてくれなかった。
でも、ぼくはわかってしまった。

「ごしゅじんさま、もうかえってこないの？」

おばばのかおが
おねえのかおが
いつている。

からだか、あつくなった。

「梅！！」

紅葉ねえの声がした。
あっちこっちで、へんな音がした。

からだが、いたくなつた。

「梅、おやめ!!梅!!」

桜おぼの聲が、とおくにきこえた。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ぼくは、ごしゅじんさまの元へ飛んだ。

ごしゅじんさまのげんきなお、もういつ見たかわかんない。

ごしゅじんさまの笑ったかお、ぼくもうわすれちゃった。

ごしゅじんさまの作った歌、あれが最後なんて、ぜったいやだ。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ごしゅじんさま。

ぼく、まだごしゅじんさまをげんきにしてないよ。

ぼく、あの歌の意味わかんないよ。

ぼく、ごしゅじんさまにしかおしえてもらいたくないよ。

だから、またごしゅじんさまにあいたいよ。

だから、まだそばにいさせて。

だから、ぜったいにはなれたくないよ。

だから、独りにしないで。

だから、まってて。

まってて、いまいくから。

おねがいだから。おねがいだから。

そんなかおしないでごしゅじんさま。

ぼく、まだ咲いてないよ。

からだが、いたい。
いたいよ、いたいよ。

ごしゅじんさま、ごしゅじんさま。

ここは、ドコ？

ざわざわ。

ひとの、こえがする。

「あらまあ、なしてこげなところに梅の木が？」

「何処から来たとかいなね。昨日まではなかったやろ？」
知らないことばづかいのひとの、こえ。

ここは、どこ？

ごしゅじんさまは、どこ？

ぼくは、ぼくは？

「どうなさったのですか？」

なつかしい、こえがした。

「帥殿。いやーこの梅が一晩で突然現れてましてねー。どうしたもんかと」

「一晩で？それは不思議な」

なつかしい、足音がする。

「この梅は………」

ゴシュジンサマ。

ごしゅじんさまが、いた。

かおから、涙がながれてる。

ドウシテ、ドウシテ？ゴシュジンサマ、ナンデナイテルノ？
からだに、なつかしいぬくもりがつたわる。

ゴシュザンサマ、ゴシュジンサマ？

「不思議な梅やなあ。一晩で現れて、季節はずれに花ば咲かせちよる。……帥殿、どうなさった？」

「この梅は、私の梅です」

「ん？どういうことで？」

ごしゅじんさまのかおが、

「京に置いてきてしまった、私の梅です」
笑った。

まわりのひとがざわざわいつてる。

でも、ぼくの耳には入らない。

だって、だって、ごしゅじんさまがわらってる。

ごしゅじんさまが、笑ってる。

「きてくれたのかい？こんな遠い所まで」

ゴシュジンサマ、ゴシュジンサマ。ダッテボクハ、ゴシュジンサマ
ガダイスキダモノ。

「私の元まで、飛んで来てくれたのかい？」

ダッテダッテ、アイタカテカラ。

「ありがとう、ありがとう」

そういつて、ごしゅじんさまはわらってくれた。いままでいっと
うのえがおで。

そして、ぼくになまえをつけた。

「ありがとう、飛梅」

東風吹かば

匂ひおこせよ

梅の花

主なしとて

春を忘るな

菅原道真

—主恋しき梅の情—

終

＊＊

この話の元ネタ、分かって下さるでしょうか。

太宰府、飛梅ときたら……アレですよ。

そう、これは学問の神様、菅原道真公の伝説の一つ、主を追って飛んできた梅の話です。

それを、私が勝手に使って私好みで作っちゃったわけです。

著作権問題にはならないはず…。

なお、文中の菅丞相様も、帥殿も、菅原公の称です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2215g/>

短編詰め込み所。

2011年1月16日03時39分発行